

主要蘭業地早島町における蘭筵業

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 岡山県の蘭筵業における都窪郡
- 3 都窪郡早島町の概況
- 4 蘭筵取引地としての早島町
- 5 蘭筵生産地としての早島町
- 6 農家における蘭筵生産
 - (1) 副業としての蘭筵製造状況
 - (2) 農家における蘭筵生産

1 はじめに

今日の岡山県都窪郡早島町は、江戸後期には備中における畳表の取引の中心地、大きな産地であった。片山新助氏は、最近刊行された『早島の歴史 1 通史編(上)』において、1708(宝永5)年の早島東三カ村の「蘭田運上書」、同年の『早島村外三ヶ村明細書』により、すでにこの時期には早島に蘭草、畳表の生産があり、その後発展したということを記述し、さらに、大阪の畳表問屋近江屋藤八の大阪西町奉行所提出文書に西日本の銘柄の代表として備後表とともに早島表があげられていること、1836(天保7)年に畳表大問屋大文字屋西川家が早島に出店を置いたこと、1870(文化7)年刊行の滝沢馬琴の『夢想兵衛胡蝶物語』に「近頃表がへした早島の^{たたみ}席薦へ心なく酒をこぼすとき」という記述のあることなどから、「早島が江戸後期には備中に

おける畳表の大産地に成長し、早島表が有名ブランドであったこと」がうかがわれる、と記している⁽¹⁾。この早島町は高度経済成長期に至る時期まで、「畳表と花苧蔦の町」をキャッチ・フレーズとしていた。ここでは、このような蘭苧業の一中心地であった早島町における蘭苧生産の状況の検討を行なう。蘭苧生産の状況をより具体的に把握するための町村レベルでの検討の試みとしてである。

2 岡山県の蘭草における都窪郡

蘭苧には多様な用途があるが、住生活に不可欠の敷物としての用途がその最大のものである。この蘭苧は明治以降は畳表と花苧とが主要なものとなる。畳表は藁床に装置されて畳として日本住宅に具備されるものであるのに対して、花苧は主として外国で使用される敷物である。畳は古くから使用され、この早島ではすでに普及していたと思われるが、1867（慶応3）年、ここ早島と同じ備中国の矢掛の在の当時備中国小田郡川面村では四間どりの家にしてはじめて一間が畳敷きであった⁽²⁾。また、今の岡山市牟佐から山陽町にかけての赤磐郡西高月村の1905（明治38）年の文書には維新前との衣食住の比較が行なわれているが、住については「住家ノ如キ平屋草葺ニシテ室内ノ敷物ノ如キモ概苧或ハ莞苧ナリシカ、今ハ二階造瓦葺畳表ニ起臥セサルモノナシ」という記述がある⁽³⁾。先進地域に属するここ岡山県の県南部においてさえも畳は一円的には普及しておらず、庶民が敷物として普段に使用することにはかなり地域差があった。原料を蘭草以外のものとする多様な敷物類＝苧類があり、畳の普及はむしろ明治以降である⁽⁴⁾。畳表の生産はこの国内需要を市場条件として展開する。

花苧は重要な輸出品として明治10年代に開発され、以後、急速に発展する。安政の開港を契機に綿工業製品などの近代工業製品が蕩々として輸入され、国内綿業を圧迫するが、他方、蚕種、生糸、茶などが輸出された。明治

期に入ってから、アメリカを主な輸出先とする花筵もその一つで、例えば1902（明治35）年には輸出の大宗である生糸の9%ほどの額の輸出があった。⁽⁵⁾このように外貨獲得の上で大きな役割を担った。この花筵の急速な発展が蘭産生産全体を引っ張ったのである。⁽⁶⁾

蘭産の原料は蘭草である。畳表、花筵の原料は多くはこの蘭草を原料とする。それは畳表のもう一つの原料となる七島蘭＝（苜蓿）と区別するために、備後蘭と呼称される。七島蘭はカヤツリ草科に属する植物で、江戸時代には豊後の国東半島周辺地域が主産地となっていたが、ここで対象とする時期には大分県が最大の産地である。

蘭＝備後蘭を原料とするのが備後表で、これが普通の畳表である。七島蘭を原料とするのが琉球表である。これは七島蘭・豊後蘭とも呼ばれる。この琉球表は住居用畳表としての品質では備後表に及ばないが、強靱さにおいてそれに勝る。

この岡山県は蘭産生産のわが国の主要の産地である。生産額でみると、岡山県は畳表は明治・大正期を通じて大分県、広島県とともに主要三県の一つであった。大分県は琉球表の主産地であるが、岡山県はほぼ備後表のみで、備後表についてみると広島県とともに2大産地である。花筵は終始岡山県が全国の第1位であった。両者を主とする蘭産全体では、岡山県は明治20年代以降は全国第1位であった。⁽⁷⁾

この岡山県における蘭産の産地は、「畳表は岡山県の特産にして県下一円之を製するも、特に主産地として目すべきは、現今、都窪・吉備・小田・御津・上道・後月の諸郡なり、就中優等ものを製産するは御津郡南部・都窪郡の中部等となす」としている。⁽⁸⁾1899（明治32）年について郡市別生産額をみると、全県100%として、都窪郡46.6%、御津郡15.8%、吉備郡14.2%、児島郡9.4%で、都窪郡が郡市別にみて中心地である。⁽⁹⁾

3 都窪郡早島町の概況

この都窪郡早島町は、1889（明治22）年に前瀧村、矢尾村、早島村が合併して早島村となり、1896（明治29）年に町制をしいて早島町となった。以来町村合併せずに今日に至っている。岡山・倉敷の両市に挟まれた町である。町域の北部は備南台地などの低い丘陵地で、南部が平坦地である。かつては水稻、蘭草栽培で岡山県の中心地域となる裕福な田園地帯であった⁽¹⁰⁾。1937年1月に岡山県農事試験場蘭草試験場がここ早島町に設置されている⁽¹¹⁾。岡山市と倉敷市の間に両市に接する位置にある早島は、その工業化・都市拡大化、幹線道路開通の影響により、就業・産業構造は大きく変化した。耕地の壊廃が進み、農業は大きく衰退した。特産である蘭草は、農林業センサスでみて、1960年の71.2haから1985年には3haへと激減した⁽¹²⁾。

1922（大正11）年の文書には、北部の丘陵地のほかは、「総テ坦々タル平野ニシテ灌溉ノ溝渠縦横ニ疎通シ、地味肥料ノ田圃」であり、県道、郡道三谷線、一等里道が通じていて、「本町市街ハ概ネ此等道路ノ兩分岐点を連結スル地域ヲ中心トシ東西十町余、南北約四町ノ間富家・商店軒ヲ並べ諸種ノ工場亦其間ニ散在ス」とあるように市街が形成されていた。市街の南端を東西に貫通する宇野鉄道に早島駅があり、児島湾頭において倉敷川に合流する汐入川は、「舟筏常ニ市街地南端ニ達シ、陸海共ニ交通運輸便利ヲ極ム」と記されている⁽¹³⁾。この汐入川については、鉄道駅設置運動記事に、「従前同町の荷物は是迄大字船本の汐入川にて運送せしも、同川は暴風雨の爲め山間及び堤防より多くの土砂を押流し、且児島湾開墾起業後愈よ汐の出入緩慢となりて底浅くなり、従来は四五百石の船も自由に出入せしも今は僅かに四五十石の船も自由にならず荷車にて輸送せる有様にして、広島・下の関・九州地方運送荷物は山鉄倉敷へ荷車にて運び、東京・大阪・神戸・兵庫地方の運送は山鉄庭瀬駅へ荷車にて運びしも」…とある⁽¹⁴⁾。このように、漸次、汐入川船運は機能が低下しつつあるが、山陽鉄道開通以前はいうまでもなく、その後も宇

野線開通・児島駅設置までの時期の重要な物資の運搬手段であった。

早島はこのように農業を基盤とする農村でありながら蘭業が展開し、蘭産の取引の中心地となるなど商業的町場を形成しており、住民の職業も多様なものとなっていた。松尾圭子氏は「壬申戸籍」にもとづき、1872（明治5）年の畳表の直接生産者の存在を検討する表を作成しているが⁽¹⁵⁾、第1表はそれを再集計して作成したもので、早島の住民の職業構成を示すものである。802戸は、農業61.5%、商業9.6%、工業8.2%、その他雑業20.7%であり、農業は6割程度で、それ以外がかなり大きい。地区別では、前潟が農業が44.3%とかなり小さく、それ以外が大きい。前潟は商業は3地区で最も小さく、工業、その他雑業が3地区では最も大きい、ことにその他雑業が76戸、34.4%と大きい。それは賃労者と表示されているものが73もあることによる。ここは新田村で、まだ汐入川河岸が所在するところであり、ここは農家のほかに畳表職を生業とするもの、さまざまな賃労働を生業とするものが存在していたといえよう。これに対して東三カ村、西三カ村は農家とともに地域の住民の生活を支えるさまざまな商いがあり、職人がいた。

蘭業関係では、畳表織31、畳表仲買16、畳表問屋5、蘭仲買1などがある。畳表織は前潟15、西三カ村12、東三カ村4で、前潟が最も多い。前潟は畳表仲買はないが、問屋は2あり、専門の畳表製造が最も多く、蘭業の中心地であったと思われる。

4 蘭産取引地としての早島町

近世期の早島は備中における畳表の中心的な取引地であり、また生産地であった。明治以降も取引地・生産地であるが、まず取引地としての早島を見よう。早くも1781（天明元）年の「木屋吉十郎舟訴之事」には畳表取引には問屋8人が中心となっていたことを推測させる記述があり、1855（安政2）年には大文字屋の出店の孫八郎と地元の中屋茂吉郎、東屋和七、葭屋万之助

第1表 早島住民の職業構成

1872(明治5)年

		東三カ村	西三カ村	前潟村	合計					
		216 (65.1)	168 (67.5)	109 (49.3)	493 (61.5)	東三カ村	西三カ村	前潟村	合計	
農 業	石 工	3	0	1	4					
	鍛 冶	1	0	1	2					
	桶 屋	3	0	2	5					
	工 表 具	1	0	0	1					
	かご細工	1	0	0	1					
	傘 張	0	0	2	2					
	紺 屋	2	1	0	3					
	小 倉 織	0	0	2	2					
	足 袋	0	0	1	1					
	業 畳 表 織	4	12	15	31					
	畳 刺	0	0	1	1					
	計	18 (5.4)	21 (8.4)	27 (12.2)	66 (8.2)					
	商	旅 宿	0	0	1	1				
		船 乘	0	0	2	2				
出 職 人		21	14	0	65					
貨 移		2	0	73 ^{※4}	75					
雑 業		10	0	0	10					
業 無 職		27	16	0	43					
計		60 (18.1)	30 (12.0)	76 (34.4)	166 (20.7)					
業	大 工	2	8	1	11					
	左 官	1	0	1	2					
	計	38 (11.4)	30 (12.0)	9 (4.1)	77 (9.6)					
	合 計	332 (100.0)	294 (100.0)	221 (100.0)	802 (100.0)					

註1) 松尾圭子「幕末＝明治中期における蘭業の展開道程」『岡山史学』第9号 1961年7月, 第10表④⑤より作成。原資料は「壬申戸籍」。

2) ()内は各合計を100として構成比。

3) 松尾論文原表における表示: ※1 生菓子屋, ※2 酒屋, ※3 畳表小買をふくむ, ※4 賃労働である。なお旅宿は工業, 船乗は商業に区分されている。

の4人が江戸積畳表株式とされ、領内売人首に任命されたが、この4人は問屋頭・大問屋とも記されている、というように近世期には早島には江戸積問屋組があった⁽¹⁶⁾。このような早島の明治になってからのことを記す。

すでにみたように1872(明治5)年の早島には畳表問屋5(東分1・西分

2・前瀉2), 畳表仲買16(東分8・西分8)があった。⁽¹⁷⁾ そもそもこの地方には明治初年には、妹尾組, 早島組, 山北東組, 山北西組の4組があった。その仲間とは問屋, 仲買で, 申合カ条は口約であったが, 1881(明治14)年1月早島組が純正畳表商組合規約書を作り, ついで1884(明治17)年7月妹尾組が其組合の盟約書を作成した。1881(明治14)年1月の〔純正組) 畳表問屋仲買営業上結約書〕には, 畳表問屋営業人は, 児島郡天城村1, 都宇郡前瀉村5, 同高須賀村1, 同早島村8, 同蓑島村1, 畳表仲買営業人は, 都宇郡早島村19, 同前瀉村10, 同郡中帯江村2, 同郡早島新田村2, 窪屋郡二日市村6, 同五日市村2, 同高須賀村2, 同郡天城村2, 同郡天城新田村1となっている。⁽¹⁸⁾ 早島分が圧倒的に多いのである。

この問屋, 仲買の区別については, 「岡山県下畳表商組合規約」(明治18年11月)は「畳表問屋仲買ノ業ヲナス者ヲ以テ組織シ…」とし, 「問屋ハ必ラズ仲買人ヨリ適実ノ代金ヲ以テ畳表産ヲ購求シ各地ヘ適宜販売シ, 直ニ職工人又ハ産出者ヨリ購求スルヲ得ズ。但地方ニ於テ小売ヲナスハ適宜タルベシ。問屋ハ断然仲買ヲ兼業スルヲ得ザルハ勿論, 従令ヒ該問屋ノ家族又ハ雇人ト雖モ仲買商ヲ営ヲ得ズ」, 「仲買人ハ必ズ職工人ヨリ適実ノ代価ヲ以テ物品ヲ買集メ, 若シ本規約ニ戻リ欠尺或ハ不揃等アルトキハ総テ之ヲ排除シ勉テ精良品ヲ求メ販売人ノ姓名ヲ記シ組合中ノ問屋ヘ適宜販売スベシ。但自宅ニ於テ自用者ヘ小売ヲナスハ適宜タルベシ。仲買人ニ於テ製品ノ荷造ヲナシ各地ヘ輸出スル等問屋営業ニ紛敷所業ヲナスヲ得ズ。仲買人ニ於テ従来ノ得意先ヨリ製品ノ注文ヲ受ケタルトキハ直ニ最寄ノ問屋ニ報告シ問屋ヨリ販売スルモノトス」, 「但本条ノ場合ニ於テハ該問屋ヨリ相当ノ周旋料ヲ申受クベシ」としている。なお, 「畳表製造品ハ左ノ五種トス 長髭・中髭・小髭・引通・小中。産製品ハ左ノ五種トス 式間産・沓間半産・沓間産・八目産・十目産」とし, 製品取り扱高として, 1875(明治18)年11月~1876(明治19)年4月までの6カ月に37万1183枚, をあげている。⁽¹⁹⁾

1886(明治19)年の「岡山県下畳表商組合役員及組合員郡村姓名一覧表」

(明治19年10月1日調)には部別=組別の問屋の名簿が⁽²⁰⁾ある。あわせて数のみであるが仲買の記載がある。それを整理するとつぎのようになる。

	東京積問屋	大阪積問屋	小計	仲買	合計
第1部 岡山組	2	7	9	17	26
第2部 庭瀬組	2	4	6	57	63
第3部 妹尾組	2	2	4	36	40
第4部 早島組	6	1	7	30	37
第5部 倉敷組	1	2	3	17	20
第6部 笠岡組	0	7	7	17	24
合計	13	23	36	174	210

これによると、東京積問屋13、大阪積問屋23、問屋計36、仲買174、合計210である。問屋は岡山組9で、早島組7、笠岡組7であるが、東京積は早島組が6を占めていて最多である。早島組の東京積問屋は溝手萬藏、溝手新太郎、溝手重吉、溝手幾次郎、吉田虎吉、安原正二、大阪積問屋は栗坂泰三郎⁽²¹⁾である。

1889(明治22)年の新聞記事は、「備中国都宇郡前瀧村畳仲買商溝手萬造は同郡屈指の仲買商のよしなるが、昨廿一年中に該品を売捌きたる高は引抜と称するもの老間式間取交ぜ八万枚、此代は八千円にて、輸出先は東京・大阪・神戸等なりと。又同郡同村溝手幾次郎も同業の者なるが、昨廿一年に同品を売捌きたるは六万枚、此の代価六千円にて、輸出先は同様なりと」と報じている。⁽²²⁾

また、1898(明治31)年の一新聞記事「製筵業不振」は下道郡の製筵業の不振の状況を記すものであるが、そこに「而して売り捌方は大抵妹尾・早島辺より来る仲買者を俟つものなるも⁽²³⁾」としてこの早島の仲買が買い集めていることを報じている。

明治末期の岡山県の蘭産産地において問屋数が多く、かつ有力なるものがあるのは、岡山市、早島町、倉敷町、庭瀬町、笠岡町で、問屋の1カ年間の畳表取扱高は、多い者は20万枚、少ない者でも5千枚以上で、たいへん盛んである、という。⁽²⁴⁾

以上のような記述から、この早島が蘭産の主要な取引地であることが明らかになったといえよう。

5 生産地としての早島町

この早島町の蘭産生産についてそれを数量的に把握することは容易なことではない。以下、この生産地としての早島町をみよう。

『明治二十一年岡山県農事調査』は、この早島町の属する都窪郡の農家の生活について、「本郡ノ専業農家ハ収入ノ豊ナルモノハ十中ノ一ニシテ、其九ハ概シテ豊ナラス。然ルニ兼業ノ者ハ商業ナリ工業ナリ、他ニ幾分ノ増収入アリ、以テ困難ヲ免ルルモノノ如シ。而テ専業者極貧困ニシテ殆ント生活ニ苦ムモノ十中ノ一位ハ之レアルナラン」(都宇郡)、「本郡ノ専業農家ハ収入多カラズ。生活困難ナルモ工商業兼業家ハ概シテ活路少シク可ナリ」(窪屋郡)と記し、農家の余業の種類として、「重ナル余業ハ婦女子農業ノ余カヲ以テ蘭蓆ヲ製造スルモノ多シ」(都宇郡)、「米穀小売仲買、絞油、綿仲買小売、畳表職、酒酢醬油小売、足袋仕立、古着商、雜商ノ類」(窪屋郡)と記しているが⁽²⁵⁾、蘭産製造が広汎な農家余業であったことを示している。

また、1908(明治41)年の『郡是資料 岡山県都窪郡』は、「副業トシテノ花蓆畳表ノ価値」として、「本業ハ郡内一般ニ普及シ至ル所織機ノ音ヲ聞カザルナキノ盛況ヲ呈セルモノ、畢竟仕事ノ簡易ニシテ比較的収入多ク而カモ安全ニ就業スルコトヲ得レバナリ。由来本業ハ婦女子ニ適シ緻密ナル技術ニアラザルヲ以テ練習等ニ経費及ビ日時ヲ要セズ、年中間断ナク従業シ得ルノミナラズ、別ニ資本ヲ要セズ自家ノ一隅一室ニ織機ヲ装置シ製織スルコトヲ

得。殊ニ之ガ原料タル蘭草ハ是農家ガ栽培セルモノナルヲ以テ、夫々織機ヲ備ヘ農閑ニ家族ヲシテ之レガ製造ニ従事セシムルモノ多シ。是等ハ所謂加工販売ヲナスモノナレバ其利益ヤ多大ナルベク又非栽培者ニシテ他ヨリ原料ノ供給ヲ仰ギ若クハ工場ニ使用セラレテ該業ヲナスモノモ一日平均二十銭乃至參拾五銭位ノ工賃ヲ得ルコトハ敢テ至難ニアラズ。之レガ為メ農家經濟ニ及ボス効果偉大ナレバ現下ニ於テハ実ニ有力ナル副産物ト認メ居レリ」と記している。⁽²⁸⁾

これは1908（明治41）年刊行であるので、こころみに同年の都窪郡の蘭蕙製造をみると、製造戸数と従業職工数は、花蕙480戸・1万0058人、畳表真座兼花蕙248戸・畳表真座3017戸・職工あわせて3977人、製造戸数は合計3745戸である。この年の都窪郡の農業戸数は1万0161戸であるので、農家の約4割にあたる蘭蕙製造戸がある。⁽²⁹⁾ 蘭蕙製造がすべて農家で行なうわけではないが、きわめて広汎な農家副業として展開していたのである。

このような1888（明治21）年の「農事調査」の記載や、1908（明治41）年の「郡是資料」の記述は、この蘭蕙生産が蘭草栽培と結合して、この地域において広汎に展開していたことを示している。このような都窪郡に属する早島における生産把握についてみよう。

まず、近代地域史の研究の基礎的史料である府県統計書であるが、それは郡市別把握を基本としている。『岡山県統計書』もそうであり、郡市単位の記載で、町村ごとは極めて少ない。町村ごとのものは、現住戸数・現住人口、本籍人口が1902（明治35）年から、米麦などの農産物の作付面積・収穫高が1926（大正15）年からは掲載されているほかは町村別はない。したがって、この『岡山県統計書』によって把握することはできない。

この『岡山県統計書』には個別工場の記載があり、早島町所在の工場が判明する。ただし職工10人以上を工場としているので、数は多くない。また、そこには物産県外移出入があり、鉄道駅・港津などから出荷・入荷量額が記載されている。

このような資料的状況のなかで生産の状況を明らかにしていきたい。

まず、畳表の生産に携わる者の数は多かったに相違ないが、その数の把握はこのように資料的にみてきわめて困難である。そのようななかで、1872(明治5)年⁽²⁸⁾についての松尾圭子氏の検討がある。第2表は松尾氏のものを再集計して作成したものである。全戸数802, うち畳表織は31であった。これを専業者とみる。802戸主以外で畳表の製造に従事している者は235人である。1戸あたり0.29人の家族畳表製造従事者がいることになる。最も多いのは東三カ村で1戸あたり0.52人で、それは西三カ村の0.16人、前潟の0.10人

第2表 早島の畳表製造者数

1872(明治5)年

	戸主数	家族畳表製造者	100戸あたり家族畳表製造者	家族畳表製造者と戸主との統柄								
				母	妻	長女	次女	長男嫁	姉妹	隠居	その他	
農 業	東三カ村	216	144	66.7	2	104	18	7	7	4	1	1
	西三カ村	168	18	28.6	4	6	2	4	1	1	0	0
	前潟村	109	2	1.8	2	0	0	0	0	0	0	0
	計	493	164	33.3	8	110	20	11	8	5	1	1
商 業	東三カ村	38	13	34.2	1	8	2	1	1	0	0	0
	西三カ村	30	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0
	前潟村	9	0	0.0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	77	13	16.7	1	8	2	1	1	0	0	0
工 業	東三カ村	18	12	66.7	1	6	5	0	0	0	0	0
	西三カ村	21	18	75.0	2	10	2	1	1	2	0	0
	前潟村	27	16	59.3	0	6	3	1	3	0	0	3
	計	66	46	69.7	3	22	10	2	4	2	0	3
雑 業	東三カ村	60	5	8.3	1	1	0	3	0	0	0	0
	西三カ村	30	4	13.3	2	2	0	0	0	0	0	0
	前潟村	76	3	3.9	0	3	0	0	0	0	0	0
	計	166	12	7.2	3	6	0	3	0	0	0	0
合 計	東三カ村	332	174	52.4	5	119	25	11	8	4	1	1
	西三カ村	249	40	16.1	8	18	4	5	2	3	0	0
	前潟村	221	21	9.5	2	9	3	1	3	0	0	3
	計	802	235	29.3	15	146	32	17	13	7	1	4
畳 表 織	東三カ村	4	3	75.0	1	1	1	0	0	0	0	0
	西三カ村	12	12	100.0	2	6	2	1	0	1	0	0
	前潟村	15	11	73.3	0	3	3	0	2	0	0	3
	計	31	26	83.9	3	10	6	1	2	1	0	3

註1) 第1表と同じく松尾論文の第10表㊸㊹より作成。

を大きく上回る。職業別では工業は家族畳表製造者が最も大きく、全村で1戸あたり0.70人で、その3地区ともに大差はない。農業は全村では0.33人であるが、東三カ村では0.67人、西三カ村は0.28人、そして前潟0.18人で、東三カ村はきわめて大きく、前潟はかなり小さいなど、地区によって差がある。すでに、この前潟は農業戸のウェイトが最も小さく、また専門的畳表織が最も多い所であるとみたが、その家族は畳表製造ではなく賃稼ぎ的なものが多かったのであろうか。

畳表生産に従事する家族員の戸主との続柄は、母33人、妻137人、長女29人、次女13人、姉妹11人、長男嫁9、隠居・その他各1で、すべて女子である。畳表織を職業とする31戸の戸主31人とその家族従事者26人は専業者であるが、この専業者とその家族のほか、その他職業戸の家族209人の婦女子によって畳表は製造されたのである。

その生産額の把握もまた困難であるが、断片的には知ることができる。

当時の新聞には、「備中国都窪郡茶屋・早島の両町は畳表の特産地にして、中等以下の者は十中八九は畳表を織りて家計を立て居れるが」と報じているが、⁽²⁹⁾やがて、1910（明治43）年に開通する宇野線の敷設問題が起り、沿線各地の停車場誘致運動の展開のなかで、新聞に各地の物産の掲載などがみられるようになる。

1906（明治39）年1月の一新聞記事「宇野線停車場設置運動」は、都窪郡福田村・妹尾町・早島町・茶屋町、児島郡彦崎村・秀天村の物産状況などを記すが、早島町についてつぎのように報じている。⁽³⁰⁾

同地は花菱及び畳表の特産地にて、花菱の機数も八百余台にして一ヶ年間の花菱製造高を同町実業家に就て聞得たるに、先づ花菱は五千二百十本、畳表は二万八千束、蘭草にては長蘭一万二千斤、六蘭九千斤、トボ蘭五千斤、玄米三千石、雑穀八百石、鮭粕七百俵、人造肥料千二百俵、大豆粕千百枚、酒類五百二十挺、砂糖千樽、二万八千斤にして、花菱、畳表は年々増加し、北は妹尾町大字箕島に接して同地よりも花菱、畳表、蘭草其他多く出荷あり

また、1910（明治43）年6月の一記事「宇野鉄道停車場」は宇野線開通にともなう各駅の乗降客、貨物の予想を記している。⁽³¹⁾

早島駅については、「…此附近一帯は藺草・畳表・花藺の主産地にして、富農・巨商多く、米穀の産出亦頗る多大なり。試に当駅より輸出入すべき乗客及び貨物を予想すれば、乗降客は各々約四万人内外なるべく、貨物は概略左表の如くなるべしと云ふ」としている。そして、早島駅などの移出入品（予想）の品目と数量をあげているが、藺草、藺製品関係のものはつぎのごとくである。

早島町	藺座	75,000枚	花藺	250,000本	藺草	10,000貫
妹尾駅	畳表	500束	花藺	43,200本		
茶屋町	畳表	10,000枚	花藺（20間物）	200,000本、同（1間物）	50,000枚	
			藺枕	100,000個	藺草	10,000貫

これによると早島が最も多いことになる。

つぎに早島駅からの物産県外移出入がある。まず、移出・移入額は1910（明治43）年から1937（昭和12）年まで記載がある。第3表はそれを示す。1918（大正7）年、1919（大正8）年は移出額のみである。移出と移入を比較すると移出が移入を大きく上回っている。移出入額の推移は、1919年を一つのピークし、1924（大正13）年を小さいピークとし、1927（昭和2）年を最大のピークとしている。物産品目部門別は1910（明治43）年から1914（大正3）年まで記載されている。第4表はそれを示すが、これによると移出は編物及同原料と穀物及果実野菜類が大きい、1910年は穀物及果実野菜が最大で、編物及同原料がそれを少し下回っているが、1911（明治44）年以降は編物及同原料が圧倒的なウェイトを占めるに至っている。

1918（大正7）年、1919（大正8）年は移出額の掲載だけであるが、個別品目ごとの移出先が記載されている。第5表がそれである。1918年は、最大

第3表 早島駅における県外物品移出入額

	移出	移入	合計		移出	移入	合計
1910(明治43)	266,704	88,339	355,043	1924(13)	4,585,891	233,639	4,819,530
11(44)	227,180	129,228	356,408	25(14)	3,285,995	395,724	3,681,719
12(大正1)	329,028	49,065	378,093	26(昭和1)	2,115,628	802,298	2,917,926
13(2)	353,163	56,758	409,921	27(2)	10,450,263	52,095	10,502,358
14(3)	273,912	31,725	305,637	28(3)	2,223,113	253,540	2,476,653
15(4)	410,837	50,785	461,622	29(4)	1,492,229	115,749	1,607,978
16(5)	476,356	60,000	536,356	30(5)	1,059,166	121,989	1,181,155
17(6)	891,689	78,140	969,829	31(6)	1,117,925	47,606	1,165,531
18(7)	2,896,392	—	—	32(7)	1,184,012	45,642	1,229,654
19(8)	5,869,388	—	—	33(8)	1,352,756	46,076	1,398,832
20(9)	2,034,474	872,054	2,906,528	34(9)	1,657,240	115,283	1,772,523
21(10)	1,791,367	311,398	2,102,765	35(10)	1,477,440	58,460	1,535,900
22(11)	2,867,667	573,394	3,441,061	36(11)	1,263,588	144,024	1,407,532
23(12)	3,228,878	1,347,065	4,575,943	37(12)	1,005,096	935,272	1,940,368

註1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

第4表 早島駅県外物品移出入額

(1910~1914年)

	穀類及 果実 野菜類	飲食物	糸類及 綿類	編物及 同原料	油類及 燃料	其 他 雑品	合計
1910 (明治43)	移出 156,200	—	—	144,859	—	—	266,704
	移入 —	1,800	31,762	—	14,387	40,400	88,339
	移出入 156,200	1,800	31,762	144,859	14,387	40,400	355,043
1911 (明治44)	移出 118,200	—	—	227,180	—	—	227,180
	移入 —	1,800	28,579	—	20,446	62,000	129,228
	移出入 118,200	1,800	28,579	227,180	20,446	62,000	356,408
1912 (大正元)	移出 36,398	—	—	292,630	—	—	329,028
	移入 —	—	6,725	—	—	42,340	49,065
	移出入 36,398	—	6,725	292,630	—	42,340	378,093
1913 (大正2)	移出 54,694	—	—	298,469	—	—	353,163
	移入 —	—	24,200	—	—	32,558	56,758
	移出入 54,694	—	24,200	298,469	—	32,558	409,921
1914 (大正3)	移出 70,060	—	—	203,852	—	—	273,912
	移入 —	—	—	—	31,725	—	31,725
	移出入 —	—	—	203,852	31,725	—	305,637

註1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。

2) 部門はこの表の5部門のほかには水産物、織物及同製品、金属及同製品、肥料があるが、早島駅はいずれも空欄である。

第5表 早島駅における県外物品移出入

	数量単位	1918 (大正7)		1919 (大正8)		移出先	
		移出 数量	移出 価額	移出 数量	移出 価額		
穀類	米	石	3,917	130,671	4,663	215,478	大阪, 堺 [*] , 兵庫, 京都
	麥	石	794	19,509	1,088	28,723	兵庫
	計	—	—	150,180	—	244,201	
織物	綿布及同製品	—	—	43,028	—	1,714,197	大阪, 神戸
	計	—	—	43,028	—	1,714,197	
編物及原料	花 菴	本	32,940	230,980	—	—	神戸
	野草菴	枚	77,800	311,200	155,150	775,750	神戸
	疊 表	枚	2,858,400	1,429,200	2,833,600	2,451,240	大阪, 汐留 ^{**}
	蘭 草	貫	998,460	732,204	445,500	594,000	遠江, 近江, 尾張 ^{***}
	計	—	—	2,703,184	—	3,910,990	
	合 計	—	—	2,896,392	—	5,869,388	

註1) 兩年度の『岡山県統計書』より作成.

2) *は1918年のみ, **は1919年のみ.

の畳表は285万8400枚, 142万9200円で大阪, 野草菴7万7800枚・31万1200円で神戸, 花菴は3万2940本, 23万0980円で神戸である。蘭草も99万8460円を移出し, 遠江・近江を移出先としている。1919年はこの前後のピークの年で, 移出額は前年をいずれにおいても大きく上回った。畳表の移出先は前年の神戸に汐留が加わった。花菴は記載がないが, 野草菴が大きくなっているが移出先は神戸である。蘭草の移出先のは前年の遠江・近江に尾張が加わった。

以上は鉄道敷設・駅設置に関わっての出荷の背景の生産についての見込, および鉄道駅からの移出入であった。早島町の生産そのものはなかなか把握できないが, 早島町役場資料によると早島町の生産高は1910(明治43)年については判明する。それによると物産高はつぎのようになる。

この年の岡山県の畳表生産高は, 数量237万8633枚, 価額は80万8704円であるので, 早島町はそれぞれその6.3%, 5.6%を占め, また, 輸出向菴菴は252万6863円であるので, その5.3%である。⁽³²⁾ 1町村の占めるウェイトとしては小さくない。早島が主要産地であることを示すものである。

第6表 早島町の物産高 1910（明治43）年

	生産数量	生産額	構成比
畳表	150,000枚	45,000円	11.9 %
ミノ真座	6,000枚	3,600	0.95
花筵	22,500本	135,000	35.8
藺草	161,700貫	54,000	14.3
米	8,140石	101,750	27.0
小麦	2,200石	22,000	5.8
裸麦	1,194石	8,955	2.4
蚕豆	450石	3,600	0.95
その他	3,600	0.92
合計	377,372	100.0

註1) 「物産数量及価格取調書」『農商工等の統計調書』
 (早島町役場文書目録65)より作成。

『現勢調査簿』には早島町の1922（大正11）年より1930（昭和5）年までの各年、1932（昭和7）年から1935（昭和10）年までの、畳表、真座、花筵、野草筵について、生産総価額、製造戸数（畳表、真座・花筵・野草筵）、職工数、あるいは生産高（数量、価額）＝畳表、真座、花筵、野草筵ごと、が記載されている。この間の一覧は付表に示した。

1922（大正11）年はつぎのようにになっている。

畳表、真座、花筵、野草筵

生産総価額 318,273円、

製造戸数 畳表209、真座・花筵・野草筵310、

職工数 594人

生産高 畳表 備後：94,300枚・103,730円 琉球：0

花筵 40ヤード物 3,950本・82,950円

40ヤード物以外ノモノ 27,950枚・119,285円

野草筵 3,620枚・12,308円

6 農家における蘭莖生産

(1) 副業としての蘭莖製造状況

畳表の製造は多くは農家の副業として行われるが、その様子については、「製織に従事するものは、古来より、婦女子なりき。其婦女子と雖、他工業に於けるが如き単純なる職工に非ず。概ね良家の妻女又は娘等なり。之れ蓋し畳表の製造は概して農家の副業にして主産地の農家は、多きは五六反、少なきも一反歩位の蘭草を栽培せざるものなく、之を刈取りたる時は、長蘭は多く花莖の原料として蘭草の儘売却するも、六蘭トボ蘭（短蘭の名称）は自作者自ら畳表に製造して売却するを普通とするを以てなり。而して其製造に従事するものの年齢は十四・五歳より五十歳位のもの普通にして、最盛期には夜業を為すものすらあり。手先の敏捷なるものは一日三枚乃至五枚を製す。現今製造業に従事するもの県下一万三千人あり、県下を通し一日平均約七万枚の製産力あり⁽³³⁾、「其製造業者が原料の蘭草が自家作と否とに拘はらず今も昔も渝らず農家の婦女が主なるものであることは特に強味とするところである。斯の如く農家の副業であるに拘らず従来岡山県が職工奨励規定により此中の優秀者を屢々表彰するが、感謝より迷惑としておるのは皮肉なる實際談である。原料の蘭草や製織機が数次改良されたことは先にも云つた通りであるが、技能の進歩を見逃してはならぬ。最近行はれた備前四郡の聯合競技会に於て重量七百日の中継表一枚を一時間十五分にて織り上げたが如きは驚くべきである。此の如であるが故に農家の婦女が平常本業の傍ら中継、引通の何れを問わず一日三枚乃至五枚を織ることは易々たるものであって、而も家庭的であるため安定の副業たることは彼等の喜とするところである⁽³⁴⁾」と記している。農家が蘭草を栽培し、長蘭は花莖の原料として蘭草のまま売却し、六蘭、トボ蘭と呼ばれる短蘭をもって畳表を織りたてること、農家の婦女子が製造に従事し、1日3～5枚をつくることのできることを、そして農家副業として安定していることが記されている。

花菰の製造はこれと異なる。

1878（明治）11年、磯崎眠亀による錦莞菰の開発とその海外輸出を契機に花菰生産は急速に展開する。それは「明治二十三四年ノ頃ニ至リ県下製菰会社ノ勃興スルコト非常ニ盛ンナリ」、そして1893（明治26）年には紋花菰が現出して、「二十七八年ニ至リ最モ隆盛ヲ極メタリ」という⁽³⁵⁾。ここ早島においても、早島物産会社が設立される。矢吹貫一郎、安原正二、渡辺定吉協力して設立、とされているが⁽³⁶⁾、新聞記事によると、資本金2万円を以て花菰製造輸出を営業するもので、頭取には納所勇、取締には大森孫九郎、大森基平、支配人には溝手新太郎の諸氏が選ばれて就任した。「尚盛んに業務拡張を計る筈」と報じられている⁽³⁷⁾。

この早島物産会社は、これは1900（明治33）年営業上の失敗で破産し解散、同年4月、矢吹貫一郎は神戸市輸出商人米国人オムスデットと合資会社を設立し、早島物産会社の建物および機械を買い受け、早島物産合資会社を設立、1911（明治44）年12月、オムスデット米国に帰国により早島合資会社解散、矢吹貫一郎は建物・機械等を引き継ぎ、早島物産商会と改め、個人営業となった。この間の花菰生産数量・価格は、早島物産株式会社時代：11万6400本・97万0550円、早島合資会社時代：41万7640本・356万5800円、早島物産商会時代：5万0210本・58万7245円、という⁽³⁸⁾。

この会社形態、あるいは多くは個人企業としてであるが、岡山県下には多くの「工場」が生み出された。ここでいう「工場」とは職工10人以上の製造所である。1899（明治32）年には県下には95の花菰工場がある。その職工数2123人（うち男工946）人、1工場平均22.3人である。早島町は4工場・職工74人（内男工33人）、1工場平均14.8（同6.6）人である。工場の多い町村は、妹尾町：10工場・職工252（内男127）人、撫川町：7工場・職工110（内男4）人、福岡村：6工場・職工178（内男94）人、藤戸町：6工場・職工101（内男52）人、船穂町：6工場・職工118（内男70）人、茶屋町：4工場・職工185（内男92）人、で、茶屋町は4工場で早島と同じであるが、職工

数は185人と早島よりはるかに多い。⁽³⁾

(2) 農家における蘭産生産

先にみたように、1910（明治43）年分の早島町の物産生産額の構成は、花蕙35.8％、米27.0％、畳表11.9％、蘭草14.3％、小麦5.8％、裸麦2.4％などであり、花蕙、畳表、それに0.95％のミノ真産を加えると蘭製品は48.7％に達する。さらに蘭草を加えると、実に63％が蘭業品である。米麦生産を基礎とし、蘭草を栽培し、それを加工すること、そしてこの地域の蘭業の取引地としての商業活動が行なわれるというように蘭業の展開によって成り立つ町である。

先に引用した「蘭草欠乏」という1906（明治39）年の新聞記事は「備中国都窪郡茶屋・早島の両町は畳表の特産地にして、中等以下の者は十中八九は畳表を織りて家計を立て居れるが、昨今六蘭の欠乏せるに従ひ価格非常に騰貴し一斤に付（六貫目）二円二十五銭、畳表十枚に使用する堅芋も七十五銭にして、畳表十枚代価三円五十銭なれば一枚に付其織賃も僅に五銭位に当らざれば細民の困難一方ならずと云ふ⁽⁴⁾」というもので、町民中等以下のものの8～9割が畳表を織ることなどが記されている。中継ぎの畳表の原料の六蘭が不足して価格が騰貴しているというこの記事によれば、畳表を製造者は原料を購入していることになり、少なくとも蘭草栽培農家ではないことになる。

農家にとっては蘭草の栽培、その畳表としての加工による就業と収入の手立てとなった。先に中等以下の者は10中8、9は畳表を織って家計をたてている、という新聞記事を引用したが、農家以外の町民も蘭業に深く関わっていたのである。蘭業は町民の生活を成りたしためたのである。

さて、この町の家庭においてどのようにこの蘭産、蘭草は生産されたのであろうか。佐藤悦太郎氏の記録、『ある老人の思い出の記』（1984〈昭和59〉年11月28日）、『ある百性の日記』（1984〈昭和59〉年12月15日）によってみよ

う。

佐藤悦太郎氏は1900（明治33）年8月22日に早島町の畑岡に生まれた。水田7段歩、畑1段歩ばかりを自小作する農家であった。7人兄弟姉妹の4番目であるが上はすべて女であった。農業及び花菫製造に従事、戦後早島町議会議員、早島町蘭草蘭製品農業協同組合長などを歴任した。

『ある老人の思い出の記』には「物産会社」、「宇野線開通」、『ある百姓の日記』には「蘭植え」、「蘭刈り」、「祭りまえ」、「豊表織り」、「大麻をつくる」、「蘭草について」、「ゴザ織り」、「早島紡績会社設立」などをはじめとする興味深いことがらが多く記されている。

佐藤悦太郎氏は、『ある百姓の日記』の「祭りまえ」でつぎのように記している。

盆がすぎて秋の鶴崎様の大祭まで五六十日の間は田んぼの仕事がずっと少くなるので、父が蘭蒔をしつ、外の仕事をするようになって、自分は内の仕事を手伝うことにした。この地方の副業は特産の豊表を織ることのでこの家でも祭り前といって一生けん命にこの期間、表を織った。

自分はヒメウミ（経糸をつむぐ）のけいこから始めた。最初はうまくウメなかったが、すぐなれて上手にウメるようになった。蘭の本を抜いたり蘭選りを母と交代で、また母は姉と交代で表を織った。

彼岸が来て涼しくなればどこの家も必死の状態で、手間のよい家では交代で夜通し表織りに精を出す。真夜中過ぎて小用に外に出ると、はなれた隣村にあちこち灯が見え、耳をすませばカッターコットンの音がしきりに聞こえてくる。……

自分はガラガラとヒメウミ機を踏みながら「どうしてこの地方の者はこの様にガムジャラに働かねばならんのだろう、…祭に金があることは一応わかるが、こうまでしなくても…」と考えたがどうも解らなかった。 (18～19丁)

ここには、旧盆すぎからの2カ月ほどの間、農家の婦女子が豊表の製造に

従事する様子が描かれている。原料の麻をもって経糸を紡ぐこと、蘭草の芯を抜くこと、そして織り立てることを婦女子が行なうこと、秋の鶴崎神社の大祭を目途に、その間、人手のあるところでは交代で徹夜で行なわれること、その徹夜での織り立てがかなりの家で行なわれていること、などである。

蘭草は、長蘭は花莖製造用として販売され、短蘭＝六蘭でもって中継ぎの畳表を製造したという記述があった。しかし、「蘭草について」では、

蘭草については蘭草をつくって売るばかりではなく、これを利用して特産の畳表を製造して農家の経営の一助とすることで、い草作りはこの地方では米麦と共に重要な作物であるから、しぜんこの栽培に力を入れたが、長津の部落でも講習会を開き研修したが、更にとまって茶屋・帯江・豊州・早島の四ヶ町村連合の講習会にも出席して一応の技術は習得したが…ここで私は考えた。

只ものを作ることばかり考えていては駄目だ。出来得る限りこれを利用して収益をあげ、農家の経済を豊かにすることが第一である。幸いこの地方は良質の蘭草ができるから益々この蘭草の増産を図る反面、特産の畳表の製造にも今一層努力する必要があると思って、少しづつではあるが農作業も経済的に行なわねばと、良質の大麻がとれなくなったので栽培を畑作も粟・ソバをやめて手間のかからぬさつまいもと大豆を主とし、大根・ササギは父の仕事として極力わたしの余暇をつくって閑さえあれば畳表を手伝い、また私自身もこの頃では充分人並に織れるようになっていた。

表を織りながら私は今は短い蘭ばかりで表を織っているが、長い蘭を織ればなあ」と終始思っていた。いや「きっとそうしてみせる」と意欲をもやしていた。

(28～29丁)

と記し、短蘭での畳表ではなく、長蘭で織ることを志向した。そして、「病氣・飯米百姓」では、

二十五の春、私は妻を迎えた。弟も大分大きくなつたので藺草を四反ばかり植えた。その頃この地方で四反植える家は少なく二反余りが普通であった。これは予てから考えていた長イを使つてのゴザ織をしようと考えたからであった。妻が家へ来る前ゴザを織っていたので丁度都合がよかった。早速機を新調して残していた藺をもつて織って売ると藺草で売るよりずっと利益が多くもうかったので、今度できる藺は全部自家製にして売るとして村では初めてゴザを織った。

新藺がとれた時分に古い機を一台買いたして長イものから短いものも殆んど織り、ずっと短いものは畳表に織った。家のものも表を織るよりもこの方がよいとゴザ織りを喜こんでしてくれた。次の年も植えて益々田んぼの合間に盛業にやろうと思つた矢先思わぬ大障害が起きた。

家を弟に譲つて近くの田圃に小さい家を建て、貰つて分家した。三反ばかり分けてもらつて飯米百姓になった。当分藺草を少しばかりつくつてゴザ織りでもするより外に道はない。これで私は百姓に別れをつけてどつちつかずの人間になつて仕舞つた。 (29～30丁)

と記している。

当初、畳表を造っていたが、25歳のときに花筵の経験のある女性を妻を迎えたのを契機に、自家生産の藺草のうちの長藺を使ったゴザ＝花筵製造を始めた。そして、家督を弟に譲り、分家してごく小さい農地のみを貰い受けた佐藤悦太郎氏は、以後はこの花筵製造を行なうようになっていくのである。

註

- (1) 早島町史編集委員会『早島の歴史 1 通史編(上)』早島町 331～336ページ。
- (2) 藤沢晋「幕末期農村における階層別住宅構造について一備中国小田郡川面村川面を中心にして」『岡山大学教育学部研究集録』第21号 1966年。
- (3) 『岡山県赤磐郡西高月村是調査書』1905年 156～157ページ。
- (4) 拙稿「明治初期の藺筵生産」『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第3号 1995年 112～118ページ。

- (5) 拙稿「明治期輸出花莖業の展開過程」『岡山大学産業経営研究会研究報告書』第6集 1973年 5ページ。
- (6) 拙稿「明治中期の蘭莖生産」『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第4号 1996年、「明治中期～大正期の蘭莖生産」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第3号 1996年。
- (7) 拙稿「明治中期～大正期の蘭莖生産」『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第3号 1996年 参照。
- (8) 川上幸太郎『岡山県の豊表』1912年 川上印刷所 9ページ。
- (9) 『明治32年岡山県統計書』より算出。
- (10) 『岡山県大百科事典』下巻 525ページ。
- (11) 『早島町史』1955年 早島町役場 216ページ。
- (12) 神立ゼミナール「戦後高度成長期における早島町の産業構造の変化について」『SPIRAL』第24巻 1994年を参照。
- (13) 『現勢調査簿』（早島町）。
- (14) 『山陽新報』1906（明治39）年2月21日。
- (15) 松尾圭子「幕末一明治中期における蘭業の展開過程」『岡山史学』第9号 1961年の第10表a（東西6カ村分）の豊表直接生産者は、農業戸のそれが計182となっているが162で、合計は234ではなく214、戸主豊表織にこれを加えた総直接生産者数も350ではなく330であろう。なおそこでの依拠史料である「壬申戸籍」には、各戸ごとの家族の職業の有無、職業が記載されているようであり、この当時の早島の就業状況を詳細に知ることのできるものと思われるが、現在は使用することができない。
- (16) 前掲『早島の歴史 1 通史編（上）』352～357ページ。
- (17) 前掲松尾圭子論文では、豊表仲買は、第10表では、東三カ村7、西三カ村8、新田村落（前潟）はその欄なし（0）であるが、74ページの註⑬の表では、東三カ村6、西三カ村7、前潟3となっていて、異なっている。ここではこの第10表にもとづいた本論文第1表の数字をとっている。
- (18) 岡山県豊表同業組合編『岡山県豊表』1926年 41～43ページ。
- (19) 前掲『岡山県豊表』 50～51ページ、61ページ。
- (20) 前掲『岡山県豊表』1926年 62～66ページ。
- (21) 前掲『岡山県豊表』1926年 65ページ。
- (22) 『山陽新報』1889（明治22）年3月20日。
- (23) 『山陽新報』1898（明治31）年4月14日。
- (24) 前掲『岡山県の豊表』1912年 15ページ。
- (25) 「明治二十一年岡山県農事調査」『明治中期産業運動資料 第11巻農事調査 岡山県』1997年 日本経済論評社 117、125ページ。
- (26) 『郡是資料 岡山県都窪郡』1908年 岡山県都窪郡役所 251ページ。
- (27) 『明治41年岡山県統計書』による。
- (28) 松尾圭子「幕末一明治中期における蘭業の展開過程」前掲 67～69ページ。
- (29) 『山陽新報』1906（明治39）年2月21日。
- (30) 『山陽新報』1906年1月8日「宇野線停車場設置運動」。

- (31) 『山陽新報』1910年6月12日「宇野鉄道停車場」。
- (32) 岡山県の生産高は『第27次農商務統計表』による。
- (33) 前掲『岡山県の畳表』8～9ページ。
- (34) 前掲『岡山県畳表』25～26ページ。
- (35) 岡山県内務部編『花筵彙報』1897年。
- (36) 林熊吉『岡山県蘭業発達史』1954年 89ページ。
- (37) 『山陽新報』1891（明治24）年6月10日。
- (38) 前掲『岡山県蘭業発達史』1954年 89～90ページ。
- (39) 『明治32年岡山県統計書』より作成。
- (40) 『山陽新聞』1906（明治39）年2月21日。

付表 25～26ページ。

付表 早島町蘭苧業統計

1922 (大正11) ~ 1935 (昭和10) 年

年次	製造 戸数	職工数	畳表(備後)		花苧(40碼物)		花苧(40碼以下物)		花苧計 価額	真 産		野草苧		価額 合計												
			数	価額	数	価額	数	価額		数	価額	数	価額													
1922 (大正11)	畳表	219	枚 94,300	円 103,730	本	円	枚	円	-	-	-	-	-	103,730												
	真産花苧	310													-	-	3,950	82,950	27,950	119,285	202,235	-	-	3,620	12,308	214,543
	合 計	529													594	94,300	103,730	3,950	82,950	27,950	119,285	202,235	-	-	3,620	12,308
1923 (大正12)	畳表	210	枚 114,100	円 114,100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	114,100												
	真産花苧	310													-	-	4,670	98,070	31,770	41,301	139,371	-	135,210	25,700	53,970	328,551
	合 計	520													594	114,100	114,100	4,670	98,070	31,770	41,301	139,371	-	135,210	25,700	53,970
1924 (大正13)	畳表	252	枚 142,680	円 121,278	-	-	-	-	-	-	-	-	-	121,278												
	真産花苧	285													-	-	4,550	81,900	32,440	32,440	114,340	-	61,664	26,540	66,350	252,354
	合 計	537													631	142,680	121,278	4,550	81,900	32,440	32,440	114,340	-	61,664	26,540	66,350
1925 (大正14)	畳表	482	枚 101,000	円 62,620	-	-	-	-	-	-	-	-	-	62,620												
	真産花苧	285													-	-	4,680	44,460	37,460	19,479	63,939	69,790	41,874	176,100	440,250	546,063
	合 計	567													865	101,000	62,620	4,680	44,460	37,460	19,479	63,939	69,790	41,874	176,100	440,280
1926 (昭和元)	畳表	377	枚 77,500	円 42,625	-	-	-	-	-	-	-	-	-	42,625												
	真産花苧	122													-	-	2,950	22,125	12,000	8,000	30,125	-	-	-	-	30,125
	合 計	499													518	77,500	42,625	2,950	22,125	12,000	8,000	30,125	-	-	-	-
1927 (昭和2)	畳表	327	枚 79,600	円 43,780	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43,780												
	真産花苧	257													-	-	5,044	37,830	-	-	37,830	-	-	-	-	37,830
	合 計	584													741	79,600	43,780	5,044	37,830	-	-	37,830	-	-	-	-
1928 (昭和3)	畳表	337	枚 62,750	円 37,650	-	-	-	-	-	-	-	-	-	37,650												
	真産花苧	285													-	-	6,564	49,230	-	-	49,230	-	-	40,000	120,000	169,230
	合 計	642													727	62,750	37,650	6,564	49,230	-	-	49,230	-	-	-	-

1929 (昭和4)	畳表	327	} 651	64,750	31,727	-	-	-	-	-	-	-	-	31,727
	蓆花蓆	281		-	-	6,952	48,664	-	-	48,664	-	-	5,300	13,200
	合 計	609	651	64,750	31,727	6,952	48,664	-	-	48,664	-	-	-	93,591
1930 (昭和5)	畳表	307	} 734	70,600	24,710	-	-	-	-	-	-	-	-	24,721
	蓆花蓆	317		-	-	7,305	32,873	-	-	32,873	-	-	41,965	125,995
	合 計	624	734	70,600	24,710	7,305	32,873	-	-	32,873	-	-	41,965	125,995
1932 (昭和7)	畳表	320	365	80,260	40,130	-	-	-	-	-	-	-	-	40,130
	蓆花蓆	140	495	-	-	16,600	107,900	-	-	107,900	-	-	-	107,900
	合 計	460	860	80,260	40,130	16,600	107,900	-	-	107,900	-	-	-	148,030
1933 (昭和8)	畳表	325	381	19,200	76,800	-	-	-	-	-	-	-	-	76,800
	蓆花蓆	352	520	-	-	11,900	59,500	560,000	196,000	225,500	-	-	-	225,500
	合 計	677	901	19,200	76,800	11,900	59,500	560,000	196,000	225,500	-	-	-	332,300
1934 (昭和9)	畳表	320	320	370,000	162,000	-	-	-	-	-	-	-	-	162,000
	蓆花蓆	360	340	-	-	22,000	110,000	3,864,000	1,159,200	1,269,200	-	-	-	1,269,200
	合 計	680	660	370,000	162,000	22,000	116,000	3,864,000	1,159,200	1,269,200	-	-	-	1,431,200
1935 (昭和10)	畳表	320	310	270,200	162,120	-	-	-	-	-	-	-	-	162,000
	蓆花蓆	360	530	-	-	21,000	162,120	3,955,000	1,384,250	1,546,370	-	-	-	1,546,370
	合 計	680	540	270,200	162,120	21,000	162,120	3,955,000	1,384,250	1,546,370	-	-	-	1,672,370

註1) 各年度の『岡山県統計書』より作成。